山口大学教育学部研究論叢　第72巻　311頁～316頁　2023年1月

中国語における舌打ち音に関する再検討

劉　伝霞*・有元　光彦**

A Rediscussion on Tongue-clicking in the Chinese Language

LIU Chuanxia*, ARIMOTO Mitsuhiko**

（Received September 22, 2022）

中国語においては、舌打ち音の研究はいくつか見られる。しかし、話し言葉を対象とした研究はまだ十分ではない。本稿では、中国語のインタビュー会話を対象とし、舌打ち音の統語的制約及び談話的機能について考察した。その結果、以下のことが明らかになった。

a．舌打ち音は文頭、文中に現れているが、文末に現れていない。

b．舌打ち音は、聞き手に注意を促し、前に出たトピックの内容をリアルに話し始めるマーカーになっている。

これらの点は、日本語出雲方言の感動詞類「け（ー）」と類似していることから、言語普遍的な性質であるかもしれないということが予測される。また、舌打ち音は、従来の日本語の感動詞類とは音声の面で大きく異なるが、これらの性質の共通性から、感動詞類の定義を再検討する必要があることが示唆される。

1．はじめに

本稿の目的は、中国語会話に現れる舌打ち音を対象とし、劉・有元（2022）を再検討することによって、新たな観点からその特徴を解明することにある[1]。

従来の研究では、中国語・日本語・フランス語・タイ語を対象とした研究はいくつか見られる。しかし、舌打ち音は感動詞類として扱われることが多く、感動詞類の中での位置づけも明確になっていない。

例えば、于（2007）、友定・于・定延（2008）では、文献に見られる使用例、インターネット上の使用例を用いて、日本語母語話者と中国語母語話者の「舌打ち」の分布と用法に関する対照研究が行われているが、分類の域を出ていない。しかも、分析対象は書き言葉である。

それに対し、舌打ち音を話者の認知プロセスの一つとして捉えた研究としては、劉（2021b）、劉・有元（2022a）がある。例えば、データ（1）を見られたい[2]。

（1）

©MIR01：**我觉得我那会儿就是，大家都挺明确的想要去做一些有意义的事情，生活挺积极的你知道嘛，但是，我感觉，普遍大家都在说，现在的年轻人越来越丧了，越来越没有目标嘛，我不知道你是不是有这样一些，体会**

（私の周りですね、みんな明確な目標があって、有意義なことをやりたがっているよ、生活に積極的に生活しているよ、でもね、なんか、世間の人々は、現在の若者がやる気がないとか、目標がないとかってよく言ってるよね、あなたもそう思っているのかどうか分からないけど）

©FIE06：**〔舌〕**、《1s》、**我觉得其实大家，有目标**

（〔舌〕、《1s》、私はみんな、目標があると思う）

（1）では、話者©FIE06に舌打ち音が出現している

＊ 江蘇海洋大学　外国語学部　中国江蘇省　lcx.kasumi@hotmail.com
＊＊ 山口大学　国際総合科学部　arimoto@yamaguchi-u.ac.jp

[1]「舌打ち音」とは、「click（吸着音）軟口蓋とその前の2箇所で閉鎖をつくり、内向的な気流によって算出される破裂音をいう」（cf.『最新英語学・言語学用語辞典』（中野弘三ほか監修、開拓社）2015年、p. 7）。

[2] 本稿では、分析対象となる舌打ち音を「**〔舌〕**」で示す。また、中国語データの下に、丸括弧で日本語訳（筆者による）を付ける。

が、これについて劉・有元（2022a：338）では次のような記述が成されている。

> 舌打ち音の先行発話の命題（波線で示す）「**你是不是有这样一些，体会**」（あなたもそう（現在の若者がやる気がないとか、目標がないとか）思っているのかどうか）は、©MIR01の質問である。後続発話の命題（下線で示す）「**我觉得其实大家，有目标**」（実はみんな、目標があると思う）は発話者©FIE06の回答であり、©MIR01の質問に否定の真偽判断を行っている。従って、舌打ち音の発話時に、発話者©FIE06が先行発話の命題に対する真偽の検討を行っていると考えられる。

また、劉・有元（2022a：342）では、中国語の自然会話・インタビュー会話を対象とし、「舌打ち音は、感動詞類（B群）と同様に、その発話時に「真偽の検討」という認知プロセスが流れている」、「舌打ち音が感動詞類（B群）と異なるのは、単独で1ターンとして現れにくい点である。」と述べている。最終的には、「嘖舌現象反映了發話者對接下來的發話內容進行檢索的認知過程」（舌打ち音の発話時に、発話者が次の発話内容を検索するという認知プロセスが流れている）という結論に至っている（cf. 劉2021b：62）。

以上の考え方は、劉・有元（2022b）における感動詞類の認知プロセスに関する仮説を適用したものである。つまり、舌打ち音が感動詞類の一つであると捉えていることになる。感動詞類というカテゴリーの中にどのような要素や現象が属するのかに関しては現時点で明らかになってはいないが、このように捉えることによって、感動詞類には様々な要素が属する可能性があること、そして認知プロセスに関する仮説がより汎用性のあるものであることが示されたことになる。

しかし一方で、感動詞類に対しては、「聞き手の注意

表１　データの概要

データ	番　号	発話者記号		インタビューイーの属性	
		インタビューアー	インタビューイー	職業	年齢（代）
❶	01	©MIR01	©MIE01	俳優・監督	40
	02		©FIE02	俳優・アップロード主	30
	03		©MIE03	俳優・監督	40
	04		©MIE04	歌手	20
	05		©FIE05	俳優・歌手	20
	06		©FIE06	俳優（トークショー）	20
❷	07	©MIE02	©MIE07	教師	40
			©FIE08	俳優	30
	08		©MIE09	アップロード主	20
			©MIE10	作家	50

（*©F：中国語母語話者 女性（Chinese Female）　©M：中国語母語話者 男性（Chinese Male））

表２　データのトランスクリプト

,	[全角]ごく短いポーズ
ー／—	日本語の表記では，「ー」は音声を伸ばしていることを表している。中国語の表記では，「—」は音声を伸ばしていることを表している。いずれも音声の長さは最短でも1秒である。
《 s》	[半角]沈黙の秒数（1秒以上のポーズを沈黙とする。）
〈 〉	[半角]同時発話されたものは，重なった部分双方を〈 〉で括る。
( )	[半角]相手の発話の間，相手の発話と同時のあいづちなどを( )で括る。
#	[半角]聞き取り不能であった部分につける。その部分の推測される拍数に応じて，#をつける。
‘ ’	[全角]①複数の読み方がある場合，その読み方を‘ ’に入れて示す。 ②日本語の読み方を‘ ’に入れてローマ字で示す。 ③漢字がない擬音語，擬態語などを，‘ ’に入れてピンインで示す。
“ ”	[全角]発話中に，話者及び話者以外の者の発話・思考・判断・知覚などの内容が引用された場合，その部分を“ ”で括る。
[↑][↓]	[半角]感動詞類のイントネーション（上昇調，下降調）を表す。
?	[半角]疑問文につける。
〔 〕	その発話がなされた状況ができるだけわかりやすくなるように，笑い，あくび，咳，舌打ちなどをするときに，〔笑〕，〔咳〕，〔舌〕，〔あくび〕などと表記する。（中国語の場合は，〔笑〕，〔咳〕，〔舌〕，〔喝水声〕（水を飲む音），〔信息铃声〕（着信音），〔打哈欠〕（あくび）などと表記する。）
「 」	固有名詞等，発話者のプライバシーの保護のために明記できない人名，国家名，地域名などを表すときに用いる。また，各データでの出現順による通し番号を付ける（例えば，「国名1」，「人名2」，「地名1」など）。

（宇佐美まゆみ(2015:16-17)を参考に筆者作成（cf. 劉 2021a:24））

を喚起するブザー」という談話的な機能を担っているという考え方がある。有元（2018）では、日本語出雲方言の感動詞類「け（ー）」が、その生起位置に統語的制約があることを示したうえで、「「け（ー）」は、聞き手の注意を喚起するブザーのようなもので、話し手による、語りという言語行動の開始の合図であるマーカーではないかと仮定される」と提案している（cf. 有元2018：291）。

従来筆者は中国語の舌打ち音を認知プロセスの一つを担うものとして捉えてきたが、有元（2018）を考慮すると、統語的制約や談話的な機能を持っている可能性もあることが予測される。そこで、本稿では、これらの可能性について考察していくことにする。

２．研究対象

本稿では、二者間のインタビューのデータ（以下、「データ❶」）と三者間のインタビュー会話のデータ（以下、「データ❷」）を対象とし、中国語母語話者の舌打ち音に関する考察を進める。

まず、本稿で扱うデータ❶は、中国の『巅锋』という番組から抽出したインタビューである。この番組は、インターネット上に公開されており、インタビューアーとインタビューイー（有名人を対象とする）の一対一の形式で、40分ほどのインタビューが行われている。データ❷は、中国の『确实该聊聊』という番組から抽出したインタビューである。この番組も、インターネット上に公開されており、インタビューアーとインタビューイー（有名人を対象とする）が一対二の形式で、40分ほどのインタビューが行われている。データ❶、❷の詳細は、表１に示す。

また、データの書き起こし記号については表２に示す[3]。

３．分析

本節では、インタビュー会話のデータに現れる舌打ち音の統語的制約・談話的機能に着目し、その先行発話及び後続発話を観察する。

まず、データ（１）を再度（２）に挙げる。

（２）

Ⓒ MIR01：**我觉得我那会儿就是，大家都挺明确的想要去做一些有意义的事情，生活挺积极的你知道嘛，但是，我感觉，普遍大家都在说，现在的年轻人越来越丧了，越来越没有目标嘛，我不知道你是不是有这样一些，体会**

（私の周りですね、みんな明確な目標があって、有意義なことをやりたがっているよ、生活に積極的に生活しているよ、でもね、なんか、世間の人々は、現在の若者がやる気がないとか、目標がないとかってよく言ってるよね、あなたもそう思っているのかどうか分からないけど）

Ⓒ FIE06：**〔舌〕、《1s》、我觉得其实大家，有目标**

（〔舌〕、《1s》、私はみんな、目標があると思う）

（２）を見ると、舌打ち音の直前に、発話者Ⓒ MIR01の発話が現れ、トピック「**现在的年轻人**」（現在の若者）を提示している。また、舌打ち音が02Ⓒ FIE06の初頭に現れ、その後「**我觉得**」（私は～と思う）という発話で、発話者Ⓒ FIE06が自分の考えについて強調している。ここから分かることは、舌打ち音は、その後の自分の発話に注目してもらうよう、聞き手に注意を促しているということである。すなわち、舌打ち音は、前に出たトピックの内容について話し始めるマーカーになっているのではないかと考えられる。これと同様の談話的機能を持った舌打ち音は、次のデータにも現れている[4]。

（３）

Ⓒ MIE07：**而榜样也只是在某个方面的榜样，因为没有人是十全十美的榜样，他只能是在某个面向，是我们的榜样**

（でもねロールモデルはある面のものだけだ、完璧なロールモデルは誰もできないので、特定の面だけで、私たちのロールモデルになれる）

Ⓒ MIE02：**嗯**

（うん）

Ⓒ FIE08：**〔舌〕，但现在网络上都希望榜样是圣人**

（〔舌〕、でもね、今ウェブ上ではみんなロールモデルが聖人であることを期待している）

（３）でも、舌打ち音が文頭に現れている。その前のⒸ MIE07に、トピックとして「**榜样**」（ロールモデル）が現れている。その後、「**但**」（でも）という逆接を表す接続詞が生起している。これが共起するということは、その直後に自分の考えを述べることに他ならない。

このことから、発話者は聞き手に注意を促すために、自分の考えを主張する開始の合図として、舌打ち音を使用していると考えられる。

次の（４）も同様である。

[3] 本稿では、トランスクリプトの「全角」「半角」の区別は考慮しない。
[4] 本稿では、舌打ち音と共起すると考えられる要素を二重線で示す。ただし、共起要素に関する議論は保留する。

（4）

©MIR01：**所以毕业之前，你就已经做了这个打算**

（卒業した前に、あなたはもうこの計画を決めたね）

©FIE05：**〔舌〕其实我一开始的时候，我就想演戏**

（〔舌〕実は私は最初の時から、演劇したかった）

（4）では、舌打ち音が文頭に現れているが、その直前にある別の話者の発話において、トピックが提示されている。また、舌打ち音の直後に「**其实**」（実は）という副詞が現れている。これによって、発話者©FIE05が前に出たトピック「**这个打算**」（この計画）について、自身の考えを強調し、聞き手の注意を喚起していると考えられる。

しかも、（4）は、「**毕业之前**」（卒業した前）という要素から分かるように、過去の時間を表していることから、発話者が過去の体験をリアルに語っていると言えよう。

以上（2）、（3）、（4）では、舌打ち音が文頭に位置しているデータであったが、次のように文中に現れる場合もある。

（5）

©MIE09：**社会也像计算机进化一样，越来越精准，越来越标准，效率越来越高，对，但，〔舌〕我们就成了零件人，不太好**

（社会もコンピュータの進化のように、より正確的、より標準的、より効率的になり、うん、でもね、〔舌〕我々は部品になってしまう、よくない）

（5）では、舌打ち音の直前に逆接接続詞「**但**」（でも）が現れている。この場合も、舌打ち音が会話の開始マーカーになっており、聞き手の注意を喚起し、前に出たトピック「**计算机进化**」（コンピュータの進化）について、自分の考えを強調している[5]。

次に、（6）のデータを見られたい。

（6）

©FIE08：**应该带他去那种〔舌〕，就是skp一楼**

（彼を連れていくべき、そのような〔舌〕、それはskp（世界のハイエンドファッション市場）の１階だ）

（6）も、（5）と同様、舌打ち音の生起位置は文中である。ここでも、舌打ち音がこの後で述べる会話の開始マーカーになっていると考えられる。また、「就是」（それは～だ）という形式で、発話者©FIE08が、前に出たトピック「**那种**」（そのような）について、自分の考えを強調している。

次に、（7）を挙げる。

（7）

©MIE07：**因为我始终是觉得，我从来没有把自己当作一个公众人物，也没有把自己当作一个有名的人，但是后来你慢慢地你会发现呢，草船借箭的那种势头呢〔舌〕，慢慢地确实呢很多人认识了你**

（私は終始そう思っている、自分を公人だと思ったことも、有名人だと思ったこともなかった、でもねだんだん感じてきたが、草船借箭のようなその勢いね〔舌〕、確かにだんだん多くの人に知られてきた）

（7）でも、舌打ち音が文中に生起しているように見える。ただ、「**草船借箭的那种势头呢**」で文が終わっていると考えるならば、舌打ち音は「**慢慢地确实呢很多人认识了你**」という文の初頭に生起していることになる。

談話的機能としては、「**确实**」（確かに）が共起していることから、発話者©MIE07が舌打ち音により、聞き手に注意を促し、前に出たトピック「**草船借箭的那种势头**」（草船借箭のようなその勢い）について、自分の過去の体験をリアルに語っていると考えられる。

次に、（8）を見られたい。

（8）

©MIE07：**那么在这种情况下，你可能，〔舌〕还是，适当的节制一下会好一点**

（このような状況で、あなたはたぶん、〔舌〕やはり、コントロールしたほうが良いかもね）

（8）では、舌打ち音が文中に生起している。また、舌打ち音の直後に副詞「**还是**」（やはり）が現れ、聞き手に注意を促し、前に出たトピック「**这种情况**」（このような状況）について、発話者©MIE07が自分の考えをリアルに語っている。

次に、（9）を挙げる。

（9）

©MIE03：**很焦虑，嗯，这也是我们〔舌〕《2s》，反正**

[5] 舌打ち音と逆接接続詞の生起位置は、（3）と（5）では逆になっている。どちらが先でも良いようである。

就是，这就是我们这几年最想说的话
（胸を痛めているね、うん、これも私たちが〔舌〕《2s》、とにかくこれは私たちがこの何年間に一番言いたかったことだ）

（9）でも、舌打ち音は文中に生起している。また、舌打ち音の直後に副詞「**反正就是**」（とにかく）が現れていることから、ここでも、聞き手に注意を促し、前に出たトピック「**这**」（これ）について、発話者©MIE03が自分の考えをリアルに語っていると考えられる。

次に、（10）を見られたい。

（10）
©MIR01：**突然间这么，〔舌〕怎么讲，我从新西兰就有这个感觉（嗯），就是跟你聊天就觉得你一直很谦虚〔笑〕，然后有点惶恐〔笑〕**
（急にこんな、〔舌〕なんていうか、ニュージーランドでこう思った（うん）、あなたと話した時に、あなたは非常に謙虚な人だと感じたよ〔笑〕、それでちょっと恐縮しているよ〔笑〕）

（10）でも、舌打ち音が文中に生起している。ここでも、発話者©MIR01が舌打ち音により、聞き手に注意を促し、前に出たトピック「**这么**」（こんな）について、自分の考えをリアルに語っている。

以上（5）～（10）では、統語的な出現位置から見ると、舌打ち音は文中に位置している。ただし、（7）での生起位置は問題が残る。いずれにしても、舌打ち音が、聞き手に注意を促し、前に出たトピックの内容をリアルに語るための開始の合図であると仮定できることには違いない。

4．まとめ

本稿では、中国語のインタビュー会話を対象とし、舌打ち音の統語的制約・談話的機能について考察した。その結果、以下のことが明らかになった。

（11）a．舌打ち音は、文頭、文中には現れているが、文末には現れていない。
b．舌打ち音は、聞き手に注意を促し、前に出たトピックの内容をリアルに話し始めるマーカーになっている。

（11）から分かるように、舌打ち音は出雲方言の「け（ー）」に類似する統語的制約・談話的機能を持っている。従って、「ある内容を語り始める際に、聞き手の注意を引き付けるために、話し手が行う合図ではないか」（cf. 有元2018：291）という仮説は、ある種の感動詞類だけではなく、舌打ち音にも提供されると考えられる。

なお、「け（ー）」の機能に関しては、有元（2018：290）によると、「しかも、過去の体験は、おおよそ聞き手が知っている（共有している）場合が多い。内容としては、わざわざ語るからには、日常起こるような話題ではなく、面白くするために、他人の失敗談などマイナス面を持った事態を強調して語ることが多くなるのであろう」と指摘されている。しかし、本稿では、インタビュー会話を対象としているためか、過去の体験をリアルに語るような場面はあまり見られていない。この点においては、自由会話の方がデータとしては適しているのかもしれない。

今後、インフォーマント調査を行い、話題との関連性を考慮しつつ、舌打ち音の本質を厳密に検討していきたい。

5．問題点・今後の課題

本稿では、以下のような問題点や今後の課題が残っている。

最も大きな問題としては、本稿では共起関係の分析については保留していることである。舌打ち音に（11b）のような談話的機能があることを明確に検証するためには、特定の共起関係があることを示すべきであるが、本稿では個別に示したに過ぎない。例えば、逆接接続詞の「**但**」（でも）、「**这**」（これ）などの指示詞、「**其实**」（実は）、「**还是**」（やはり）、「**反正就是**」（とにかく）のような副詞が共起する傾向があることは判明したが、これらの要素の共通点については解明できていない。

また、本稿では舌打ち音の統語的制約・談話的機能を扱ったが、劉・有元（2022a）で扱った認知プロセスとの関係については議論できていない。

データについては、今回の対象はインタビュー会話のデータのみであるという点も問題である。十分な量とは言えない。また、分析対象となるデータの発話者は20代～50代である。他の世代のデータをさらに分析する必要がある。また、発話者の地域、年齢、性別などの属性の影響についても考察すべきである。今後、様々な角度からデータの量を増やすべきである。

さらには、他言語の舌打ち音との対照についても考察すべきであろう。

また、会話では、舌打ち音だけではなく、笑い、咳払い、空気すすりなどの非言語音も観察される。いずれも今後の課題である。

参考文献

〈日本語文献〉

安達真弓（2021）『ベトナム語空間ダイクシスとその展開：指示詞から文末詞・感動詞へ』、勉誠出版.

有元光彦（2018）「出雲方言における感動詞類「け（ー）」について」『感性の方言学』、pp.273-294、ひつじ書房.

有元光彦（2022）「感動詞の体系―連続的に捉える試み―」『方言の研究』、第８号、日本方言研究会編、pp.29-47.

于康（2007）「中国語母語話者の「舌打ち」のコミュニケーション機能について」『Ex：エクス：言語文化論集』５、pp.109-134、関西学院大学.

金水敏（2017）「役割語における感動詞」「感動詞ワークショップ」発表配布資料、於県立広島大学、2017年12月16日.

黄郁蕾・玉岡賀津雄（2015）「中国人日本語学習者の助言場面における意識と行動に影響する諸要因」『言語文化と日本語教育』（48・49）、pp.11-21、お茶の水女子大学日本言語文化学研究会.

小林隆（2022）「感動詞の運用の地域差―東北と近畿の違いについて―」『方言の研究』、第８号、日本方言研究会編、pp.49-73.

H.サックス・E.A.シェグロフ・G.ジェファソン（2010）『会話分析基本論集―順番交替と修復の組織』西阪仰（訳）、世界思想社.

定延利之（2000）『認知言語論』、大修館書店.

定延利之（2010）「会話においてフィラーを発するということ」『音声研究』14（３）、pp.27-39、日本音声学会.

定延利之（2015）「感動詞と内部状態の結びつきの明確化に向けて」友定賢治（編）（2015）、pp.３-14、ひつじ書房.

田窪行則・金水敏（1996）「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』３－３、pp.59-74、日本認知科学会.

友定賢治（編）（2015）『感動詞の言語学』、ひつじ書房.

友定賢治（編）（2022）『感動詞研究の展開』、ひつじ書房.

友定賢治・于康・定延利之（2008）「「舌打ち」の日中対照研究に向けて」『中日非語言交際研究』pp.200-214、外語教学与研究出版社.

日本方言研究会（編）（2022）『特集感動詞の研究』、ひつじ書房.

萩原孝恵・池谷清美（2020）「タイ人の舌打ち：マルチモーダルインタラクションにおけるその意味」『山梨国際研究　山梨県立大学国際政策学部紀要』15、pp.75-86.

フェルディナン・ド・ソシュール（2016）『新訳ソシュール一般言語学講義』町田健（訳）、研究社.

森田美里（2015）「フランス人には聞こえない舌打ち音：日仏対照言語学的観点から」『フランス語フランス文学研究』106、pp.159-174.

森田美里（2019）「フランス語話し言葉における舌打ち音の諸相―音声学的、通時言語学的、地理的観点から―」『関西フランス語フランス文学』25、pp.91-92.

森田美里（2021）『フランス語の話し言葉における舌打ち音の研究』、くろしお出版.

劉伝霞（2021a）『自然会話における二連鎖感動詞類に関する研究』博士論文、山口大学大学院東アジア研究科.
http：//www.lib.yamaguchi-u.ac.jp/yunoca/handle/DT13100143

劉伝霞・有元光彦（2022a）「中国語における舌打ち音について―自然会話とインタビュー会話を対象として―」『山口大学教育学部研究論叢』第71巻、pp.335-344.

劉伝霞・有元光彦（2022b）「日本語会話の二連鎖感動詞類に関する予備的考察」『感動詞研究の展開』友定賢治編、ひつじ書房、pp.145-164.

〈中国語文献〉

陈崇国（2019）〈访谈节目中打断性话语的语用类型及其功能分析〉重庆科技学院学报 No.２、pp.70-72.

李成军（2005）《现代汉语感叹句研究》博士論文、武汉大学.

李丛禾（2007）〈感叹词的认知理据和语用功能探究〉外语学刊 No.３、pp.118-122、黑龙江大学.

劉傳霞（2021b）「關於漢語自然會話中嘖舌現象的探究」『Journal of East Asian Identities』６、pp.55-63、山口大学・淡江大学.

束定芳（2013）〈认知语言学研究方法、研究现状、目标与内容〉西华大学学报 No.３、pp.52-56.

王寅（2021）〈基于体认语言学重新解读感叹词〉西华大学学报 No.06、pp.１-８.

严辰松（2000）〈语言理据探究〉解放军外国语学院学报 No.６、pp.１-６.

张婷婷（2010）〈现代日语口语中男女用语性别差异的实证研究――以访谈类节目为例〉海外英语 No.04、pp.199-201.

赵元任（1979）《汉语口语语法》商务印书馆.

钟紫琦（2019）〈话语标记语“啧啧啧”语用功能探析〉语言文学研究、pp.16-18、南京师范大学.